

所属機関・部局・職名：東京大学医科学研究所・炎症免疫学分野・日本学術振興会特別研究員 SPD

氏名：尾畑 佑樹

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

「The Quest for Interdisciplinarity: Inspiration or Distraction?」というタイトルのパネルディスカッションでは、パネリストは全てノーベル賞受賞者 (Eric Betzig 博士、Martin Chalfie 博士、Steven Chu 博士、Stefan W. Hell 博士、William E. Moerner 博士) で構成されており、interdisciplinary research の意義や問題点、彼らの実体験について具体的な話を聞くことができた。私自身、来年から multidisciplinary research を推進している研究所への留学を予定しているため、異分野研究者と共同研究を行う際に直面すると予想される課題について深く考える良い機会となった。また、討論の途中で、若手研究者の評価基準に関する興味深い話を聞くことができた。その中で、「過去の研究業績よりも、ハイリスクな研究テーマに積極的に挑戦する前向きな意欲を高く評価する」という Stefan W. Hell 博士の言葉が印象に残った。彼らの討論を聞いて、今後はより自由な発想で自身の仮説を再考し、異分野融合に基づく研究に積極的に挑戦したいと思った。Avram Hershko 博士の講演では、「研究予算獲得のためにインパクトファクターの高い論文を目指すことは重要であるが、サイエンスとは Curiosity-driven adventure であることを忘れてはいけない」という言葉が心に残った。競争的な研究環境において成果を強く意識することは少なくないが、Curiosity から Hypothesis を作ることが現在の自分にとって最も重要な価値観かつ喜びであると再認識した。Peter Doherty 博士の講演およびマスタークラスでは、「explain science to your grandmother」というキーワードを用いて Science communication の意義について意見を述べていた。このトピックは、最終日に行われた Science Education を主題とするパネルディスカッションの内容とも関連しており、全体を通して Science communication や Public engagement の重要性を学ぶことができた。将来的にはアウトリーチ活動にも注力したいと考えるようになり、本会議に参加することで新たな価値観が生まれた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

International Get-Together という合同食事パーティーでは、免疫学者である Bruce Beutler 博士の隣で食事をすることができた。私は、彼が昨年来日した際に直接研究内容を紹介したことがあったため、面識があった。今回はその研究の進捗状況および現在考えている仮説について話し、それに対する質問とアドバイスをいただいた。また、彼が現在行っている研究に関する未発表データに

についても教えてもらうことができ、とても有意義な情報交換となった。さらに、米国でグラントやフェローシップに採択されるために必要なことや申請書作成時の注意点について、審査員という立場から具体的なアドバイスをいただいた。日本で学んできた事とは異なる視点であったため、大変勉強になった。彼は、専門分野だけでなくあらゆる自然科学に興味関心を持っており、「リンダウで出会った野鳥」と話しながら膨大な枚数の野鳥の画像を見せてくれた。驚くことにそのほとんどの種名を記憶していた。講演後の休憩時間や夕食時には、Peter Doherty 博士、Jules A. Hoffmann 博士と直接会話をすることができた。現在の私の研究内容や今後検証した仮説について話を聞いてもらうことができ、コメントとアドバイスをいただいた。Susumu Tonegawa 博士による若手研究者とのトークイベントでは、「新たな研究技術の出現に伴い、既知の現象をもう一度見直すことが重要である」というお言葉をいただいた。今後は、新しい解析技術を単に学ぶだけでなく、それをどのように活用すべきか具体的に考えながら自身の専門分野の発展に繋げたい。

### **3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。**

食事会では、同一あるいは関連分野の参加者らと、お互いの研究内容や今後検証したい仮説について紹介し合い毎晩深夜まで時間を忘れて語り合った。Career development に対する価値観を共有できる若手研究者とも出会うことができ、帰国後も情報交換を継続している。新たな交流の輪が多方面に広がったことを心から嬉しく思う。これまでに参加した国際会議では研究発表と質疑応答という単純なコミュニケーションが多かったが、今回のリンダウ会議では初めて外国人研究者とサイエンスを共有できたと感じた。通常国際学会よりも参加者とディスカッションする時間が多かったため、予想以上に研究交流・国際交流ができた。

### **4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。**

研究領域ごとに会場が分かれていることが多かったため、意外にも日本人参加者を見つけるのが難しかった。日本人参加者の中には、すでに海外の研究機関に所属している方も多く、日本と外国の研究活動の違い、海外での生活、留学のメリット・デメリットについて体験談を聞くことができた。日本人が国外で応募可能なフェローシップについての情報を得ることもできた。HOPE ミーティング参加経験がある方も多く、その意義についても助言をいただき、将来的に参加してみたいと思った。

### **5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。**

海外からの参加者（PI および若手研究者）より、来年開催されるシンポジウムでの講演依頼および研究所セミナー発表依頼を受けた。また、共同研究のためのディスカッションを目的とした海外研究室訪問も計画することができた。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

日本人として実際に海外の研究機関に所属し、実験と成果発信にとどまらず、アウトリーチ活動やシンポジウム主催、異分野研究交流などを積極的に実践したい。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

異分野研究者との深い研究交流ができるため、Interdisciplinary Meeting（5年おきに開催）への参加を勧めたい。